

しに、苔の衣をさへひきてかへりし、白波のあらかりしなごりに、いと、旅の床もものうくこそ侍りしか。

厭はずばか、らましやは露の身の憂にも消ぬ武藏の、原

〔武藏野紀行〕比は八月十五年天文上旬、あさ霧ふかくわけ入て行に山あり、いは山と云ふ、此山のうしろは甲斐の山北はち、ぶなど申し侍る、それよりむさしのくに勝沼と云所につきぬ中、それ

よりむさし野をかりゆくに、まことに行けども果のあらばこそ、はぎす、き、女郎花の露にやどれるむしのこゑ、あはれを催すばかりなり。

むさし野といづくをさして分いらん行も歸るもはてしなれば、略 中 あくれば八月十三日

あさ霧いよ、ふかくして、道もさだかに見え分ず、馬にまかせて行、長井の庄につきぬ中、やうやうすみ田川にもつきぬ、河つらをみれば、まことにしろき鳥のはしとあしとあかき鳥のむれひて、魚をくふありさま、むかしをおもひいで、略 下

〔丙辰紀行〕武藏野

名におふむさし野は、月の入べき山もなしといへば、まことにそくばくの蒼莽をすぎて、又蒼莽なり、此國の稻毛葛西、越谷岩筑、河越、鴻巣、忍なども、皆むさし野の内にて侍る、いづれも御獵場なれば、毎年爰にならせ給ふ。

國野同名稱武藏 尋常旅客宿春糧 雨餘草色連天地 郊外雲烟沒邑莊 富士雪遙花稍小

筑波陰茂薺猶長 殘星點々夜叢火 徼月纖々照射光 共往芻蕘多幾許 齊飛鳧雁百千行

豫遊兼習驅馳範 養放皆知鷹鶴方

雲夢青丘俱芥蒂 子虛烏有本荒唐 斑鳩入網風前霰 白鵝糝黏泥上霜 暴虎何曾逢太叔

非能庶幾載師望 藪蕪任見宜應採 耕穡於時亦不妨 仁愛只今覃物處 豈論五柞與長楊